C-up ワールド

2003年１２月号

２００３年１１月の山行記録

自主山行
南アルプス仙塩尾根縦走（大鹿村集中）
10月31日～11月2日

参加者

金沢和則・坂口理子

計２名

コース・行程の概略

1日目：北沢峠～仙丈ヶ岳～大仙丈岳～Ｃ１
2日目：Ｃ１～伊那荒川岳～三峰岳～熊の平～
　　安倍荒倉岳～Ｃ２
3日目：Ｃ２～北荒川岳～塩見岳～三伏峠～
　　鳥倉林道～大鹿村
　　三峰岳への登り・塩見岳への急登

報告者のひとこと感想

長い・・・とにかく長い。昨日は天候悪化のため、大仙丈を越えて早々にテントを張ってしまったため、2日目の今日は特にそう感じるのか。あまり展望のきかない樹林の尾根道を延々歩いたあげく、野呂川越をすぎて見上げると、三峰岳との標高差はなんと約７００ｍ！三峰岳って確か、間ノ岳から縦走したときはほんのわずかなでっぱりだったはず・・・北側にこんなに立派な尾根が張り出してるなんて聞いてないよ！と、叫びつつ、あえぎあえぎ登る。まあ、ここまでの尾根道では出会う人もなく、ほとんど我々だけで独占できたので、よしとするか。何とか三峰岳を登りきり、日当り抜群・展望ばっちりでいつまでもいたくなっちゃうような熊の平小屋を後に、さらに進む。安倍荒倉岳を過ぎた樹林の中のわずかなスペースを今夜の幕地とする。少人数パーティの強みである。さて、3日目。今日はいよいよ塩見を越えて、大鹿へ下山である。朝起きたときから、合流したみんなとの宴会のことしか頭にないのは言うまでもない。塩見への急登がちょっといやらしい。ガレていて、雨天時や下りには注意が必要かもしれない。肩あたりで、無線連絡をしてみる。無線機から嬉しい工藤さんの声。集中形式ってなかなか楽しい。塩見の２班はすでに山頂を後にしているらしい。さすがだ。こちらもがんばらねば・・・とはいえ、塩見からのながーい下りには、縦走の荷物がコタえる。ところが途中本谷山あたりで、みんなの現在位置がわかると、突然、金沢さんにスイッチが入ってしまった。まさか、追いつくつもりなのか！？それは無理です。ちょっと待てー！・・・と言っても待つワケがない。本谷山を駆け下り、三伏峠も小屋も突っ走り、そのまま鳥倉林道への下りへ。しかし・・・縦走の最後で、走るって・・・有り得ないでしょう！息を切らせてようやっと林道へ抜けると、心優しき横川号がお出迎え。ありがたいことです。もう1班の山野&田口組も心配してくれていたとか（三伏峠組は闘志を燃やしていたとか！？）。村の温泉で3日間の縦走の汗を流したあと、一路、集合場所の民宿「たかやす」さんへ。焚き火を囲んで、あとは野となれ山となれの大宴会。中央アルプス組も合流して、賑やかなフィナーレとあいなりました。久々の縦走で、南アルプスのでかさ（←ちょっとでかすぎ）を満喫しました。大鹿村集中山行に参加の皆様、お疲れ様＆ありがとうございました。

報告者　坂口　理子

△△△△△△△△△△△△△

自主山行
技術委員会企画 南アルプス 塩見岳
11.1(土)～11.2(日)

参加者

チームＡ ：工藤寿人、横川秀樹
チームＢ ：田口浩昭、山野昭人、山野美香

計５名

コース・行程の概略

１日目：鳥倉林道ｹﾞｰﾄ―豊口山登山口―三伏峠小屋―本谷山―塩見小屋
２日目：塩見小屋―塩見岳往復
以下１日目ｺｰｽを下山

コースの核心・ポイント

冬山に向けて心と身体の準備、初冬の山での状況判断を養う

コメント

(金)夜、高速を飛ばし鳥倉林道に入ったのは日付が変わった頃。暗闇の中を慎重に走っていると鹿がヘッドランプに照らし出されます。野生動物のフィールドに足を踏み入れた事になんだか申し訳ない気持ちになりました。翌朝は生憎の小雨。今回はゆっくりペースで空気や景色、山の中で過ごす時間を大いに楽しもうと、チームＡの寝ているまだ暗いうちに出発です。あたりが明るくなり始めた頃には雨も止み、朝靄に包まれて落葉松の絨毯を踏みしめながら歩くのはなんとも言えない心地良さ・・・山にハマってしまうワケですね。
三伏峠までは数箇所荒れている道に木の梯子が掛けられており、あたりまえの事ですが「一般道って歩きやすーい！」などと言いながら高度を稼ぎつつ、時々チームＡの足音が迫っていないか後ろを気にしたり・・。辿り着いた三伏峠小屋は２棟に分かれていて、その一部は冬季避難小屋として開放されています。テン場も整備されていて、１日目はここに泊まり翌日塩見岳往復というパターンも多いようです。
先へ進むといよいよ目指す塩見岳が力強い姿を見せ始め、這松の稜線を歩くちっぽけな３人を見守ってくれているような不思議な安心感があり、「コレコレ、この感覚がたまらないんだなー」と一人満足。
中間点となる本谷山頂は広場になっていて、ここまで順調に来たことで少しのんびりと仙塩尾根チームや中央アルプスチームへと思いを馳せながら休憩です。寝不足のＴ君は寝そべって目を閉じていました。
ここから先は天狗岩や塩見岳山頂が目の前に迫りながらも塩見小屋は隠れて見えません。さて、今日のテン場は確保出来るのか？と思いながら進むと、稜線から一段下がったところにまるでかくれんぼをしている子供のように可愛らしい小屋を見つけました。時間的には塩見岳往復も可能でしたが、お天気も良さそうなので楽しみは明日に持ち越すことにしてティータイム～お昼寝～晩餐と、まったりと贅沢な時を過ごしました。
翌朝は山頂で日の出を迎えようと５時に出発。暗い中の岩稜歩きも睡眠充分・荷も軽く快調です。いよいよ山頂直下、落石に気を付けながら岩を攀じ登るとそこは唐突に山頂（西峰）、そして前方には今まであらゆる所から何度となく見てきたそれとはまったく違った、昇り始めた朝陽に橙色に照らされて、息を呑むほど美しく荘厳な富士山が在りました。

報告者　山野　美香

△△△△△△△△△△△△△

自主山行
南ア・大鹿村集結集中―三伏峠
11月2日

参加者

日浅　尚子
斉藤　典子（ＳＬ）
久野　眞由美（Ｌ）

計３名

コース・行程の概略

８：１６　鳥倉林道ゲート
１１：３０　三伏峠
１２：００　三伏峠発
１４：３０　鳥倉林道ゲート
１６：００　大鹿村「たかやす」

コースの核心・ポイント

南ア・塩見岳稜線へのアプローチ（鳥倉林道～三伏峠）の初冬時期の観察

コメント

前夜発で諏訪で仮眠。中央道・松川ICを下りたあたりは、一面の霧だった。小渋湖を越え、Ｒ１５２から鳥倉林道の入り口を見つけるのに、少々右往左往。この頃には、すっかり晴れ上がり、鳥倉林道からはカラマツの紅葉が美しかった。
思いの他、立派に舗装された林道・広い駐車スペースを後に、爽やかな秋の朝、歩き始める。雲一つ無い、絶好の山日和。
舗装路に歩き飽き始めたあたりで、山道へ導かれる。カラマツの落ち葉が敷き詰められて、静かで心地良い登り道。
支尾根に登りついたあたりから、南面をトラバースぎみに気持ちの良い路が続く。この間、途中に行き交った登山者は、一人だけ。
カラマツがいつしか原生林に変わり、尾根の北面をトラバースしながら路はゆるゆると登っていく。次に行き交ったのが、塩見岳を往復してきた山野夫妻＆田口さん隊。集中は、これが楽しいですね。
このコースの水場と記されている所は、チョロチョロ程度の水量。（秋のこの時期だから？）塩川への分岐を過ぎて登っていくと、三伏峠小屋が見えてきた。山野さんから聞いたとおりにテン場まで行くと、おー！、塩見岳が立派に見えた、見えた！堂々と格好の良い山。
霜柱の立つテン場で、ゆるゆると大休止。無線を入れると、程なく工藤さん・横川さん隊から「今、三伏の登りー。」
そして、金沢さん・坂口さん隊から「今、本谷山。」えー！もう本谷山まで来てるの！もの凄いスピードですよね。という訳でも無いけれど、私達ゆるゆるワンデイ・ハイキング隊は、何かに追いかけられるように、ヒタヒタと下って行ったのでした・・。集中は、これも楽しいですね。
最後の林道歩き、丁度光線具合も良くて、谷に展開する紅葉が素晴らしかった。でも、何度か後ろを振り返ってしまった・・（もうすぐそこに、豪足チーム２隊に追いかれているのではないか、と）。集中は、こんな事も楽しいですね？

秋の好日の山行で、霜柱の溶けたぬかるみ・凍結・積雪などが皆無だったので快適なハイキングであったが、初冬という時期で状況によっては、北面のトラバース道などは足回り装備など注意が必要と感じました。
以下、各メンバーの感想です。

日浅さん；
鳥倉林道ゲートから三伏峠までの道は歩きやすく、枯れた松葉の上をサクサク歩きました。絶妙のペースだったと思います。
峠では、あそこが烏帽子、こっちが塩見と山座同定。もうちょっと先まで足を伸ばしたい気持ちをぐっと抑え、工藤・横川隊や金沢・坂口隊に追いつかれては・・・と、下山は、ついつい急ぎ足になってしまいました。下りのスピードアップを課題にしている私には、ちょうどよい練習です。条件が変わっていれば、違った状況だったでしょう。目の前に見ながら登らなかった塩見岳。いつか必ず登ります！南アルプスの深さ・・いいですね。

斉藤さん；
今夜は大鹿村に大集合だぁ!と思うと身も心も軽いんだナー。と私は日帰りで三伏峠往復へ向かう。どんな景色が待っているのか楽しみでしかたない。今回は”塩見岳視察”である。
長期で縦走計画を立てるとこんな山行もあるんだろうと思いつつ、しばし、峠で彼方を眺める。この先にいつかは行きたい！と目に焼き付けて来た。
あと、もひとつ忘れられないのは長ーい林道歩きも何のそので、早朝に見た紅葉が午後には陽をたっぷり浴びてさらに色鮮やかに変わっていたのには感激だった。
何もかも大満足で、明日は帰るだけっ！こんな機会はめったにない！と宴会に臨んだはずだったのにっ、夜 7 時過ぎには寝てしまっていた・・というのが飲べぇーの私としては悔いが残るところ・・でも、お宿「たかやす」が居心地よく安眠パワーが効いて？タップリ休めたということでしょうかネ。

報告者　久野　眞由美

△△△△△△△△△△△△

自主山行
足尾山塊 第二弾(秋のルートファインディング)
11/15～16

参加者

伊藤幸雄（SL）・伊藤栄子・山野昭人・
山野美香・田口浩昭・福田洋子（L）

計６名

コース・行程の概略

足尾周辺
①舟石林道より出川源頭先の 1133P の岩峰（備前楯山の北北西 1.5 キロ地点）
②渡良瀬川上流深沢林道より赤倉山（1442.0△点）
③内の篭より北東に伸びる古い（？）仕事道をたどり湿原があるという 1268.6△点を目指す

コースの核心・ポイント

地形図の尾根、沢、等高線と斜度の関係・現在地及び方向の確認を各人が行う。
特に岩、藪、急坂のトラバースなどを終えた後の現在地の確認。
３コースそれぞれタイプが違うと思われる、現地にて攻略法を検討しながら進むことになる。

コメント

早々にアクシデント発生、高速が事故により通行止めになっていた為（L）福田と田口が大幅に遅刻。最初に予定していた①の岩峰を翌日にまわし、先ずは赤倉山をこなす事にする。２台の車で深沢に向かう、間藤の先で左に入り深沢集落（廃虚）をぬけたところで車を置いて歩き始める。途中一台の車に抜かれ林道終点に着くと先ほどの車の他に２台が駐車している。沢に降りるとおじさんがナイフを研いでいて「ハンターが２組入っているから気をつけて」と教えてくれたが、どう気をつけるのかわからないが「取り合えず、こんだけうるさけりゃ鹿もハンターも気が付くでしょ」と言うことで沢沿い付いている道（地形図の半月山に向かう道）を進む。標高 1050 地形図に滝が記されているが見当たらない。その代わりに山城の跡なのか石積みと灯篭が対岸に、よく見るとこちら側には下流を見張るように人型をした石像が銃だか刀だがを持って立っている。いつの頃の物かわからないが「きっと日光方面に立ち入らないように砦にでもしてたんじゃない」「東照宮やらもあるし」などと私は勝手に解釈。歴史はわからないけどこの道で昔日の彼方に起きていた事を想像するだけでドキドキする。沢が伏流となっているが地形図の水線はまだ伸びている。標高 1140 地点で少し前に左に沢を分けたことで現在地を確認するが何人かで多少のズレが起きた。支尾根の末端にいる事はわかっているのでここから尾根に向けて登りつめる事にした。鹿の踏み跡や木を手がかり足かがりにし一気に高度を上げるが、こんな急斜面の登りでも個性が出るもので男連中はほとんど一直線に直登、馬力に物を言わす感じだが女性陣は慎重に鹿の踏み跡を拾ったりジグザグに体力の消耗を押さえながら登る。支尾根の上に出てからも暫らくは樹林の中の尾根をたどり小高いピークに到着。目指す頂上を確認しさらに岩稜まじりの尾根を登ると辺りは一転、笹原に唐松や白樺が点在する楽園のような景色が広がる。緩やかな笹原の斜面には鹿の足跡が縦横無尽に走り稜線に出ると右手に男体山がその雄姿をすっきり見せていて正面には皇海山とそこから袈裟丸山へ続く稜線がドーンと構え足尾の町が小さく見える。頂上 2：30 せっかくテントまで担いで登ったが時間も早いので降りる事にする。下りは頂上より南東に伸びる尾根にまだ新しい赤テープが律儀に 5・6 メートル間隔でついているので利用させてもらう事にする（残念なような助かったような複雑な気分ではあったが）。この尾根は岩こそ無いもののかなり急な斜度のままほとんど一直線に続き、枯葉の上を滑っているんだか、落ちているんだか立ち木につかまり速度を落とさないと加速しそうになりながらアッという間に山城跡にたどり着いた。林道終点にて幕営し１日目終了。

２日目、夜の間に振った雨のこともあり①の岩峰を後に回し③の湿原に向かう事に決定。まずは都沢ダムを目指したが、ダムとは名ばかりで見当たらず、カーナビ・自動車地図・エアリア・地形図の４巴にちょうどハンターのおじさんがいたので、道を聞きやっと目指す林道を確認し登り口を探しながら車を徐行させて進む。しかしこの林道、車を止められそうな所はみんな先に駐車されている。とうとう林道の終点まで来てしまったがここにも駐車している。伊藤さんが偵察に行くとどうやらみんなハンターの車らしく猟銃ケースや猟犬が中に・・そうこうしていると先ほど道を尋ねたハンターまで登場と相成り、

どうやらここは狩猟のメッカになっているようで地味な身なり（藪に入ることを前提とした服装）の私達では余りに危険と判断。残念ながら頂上湿原は今回はおあずけとなった。さてそれではという事で①の岩峰に行く訳だがそれがどんな物かまず見る為に備前楯山に登ってみる。名前はかなり立派。そのせいかハイカーにも人気があるようで、足尾温泉から何人も登って来る人達を抜き去り舟石峠の駐車場に車を止める。整備された道と階段を標識に従い（ここで磁石で方向を確認していたのは私達だけかも）登ればポッカリと展望が開け山頂に着いた。今日も良く晴れて男体山が見える。その手前には昨日昇った赤倉山と尾根の一本一本もよく確認できる。磁石で北北西の方向を確認。これから向かう岩峰とはどんなものかと見れば、左端は木がこんもりしているが右のはほんとにハゲ山（岩峰と言われれば見えなくもない）で事前に調べたデータでは林道脇から堰堤を越えてハゲ山の方に攀じることになっていたが、どうにも山肌というか岩肌というかがザレザレのようだ。結局、駐車場前の緩やかな尾根の方から木のこんもりしているピークにあがり、稜線をハゲ山に向かうことにして備前楯山を下る。駐車場の前の車道を横切り、さてどこから取り付こうなどと思うまもなく先人はいるもので、ココにも人のはいった踏み跡が残されている。取り合えずその踏み跡をたどりススキに分け入ると、今度は人の踏み跡などどこへやらで鹿の足跡やら糞やらのほうが断然多い。とにかく方向だけ間違えないように進むと「あれ、石碑だ」そこは集落の後らしく石碑には明治の文字が読める。井戸の跡なのか円形に石が組まれていたり、ピークに向かって段々に石が積まれて残っている。しばらくその場を動けずにボーッとして見入ってしまったが、誰かの呼ぶ声に本来の目的を思いだし次の方向に向かう。距離的には５００ｍ程なのでなんなく１番目のこんもりしたピークに到着。次の２番目までは数メートルだが全員が居る余裕があるかわからないので、田口さん山野さんが偵察に行き、OKの合図で全員移動。浮石をカチャカチャいわせながら 1133 ピークに到着。一応の目的を果たした。ここでも展望を楽しみ山座同定。次回は「日光に抜けよう」「やっぱ皇海山から袈裟丸山」「季節は残雪がいいよね」「あの上の草原はスキーでしょ」等々。もと来たルートを引き返し集落の後を横切る時はススキに埋もれる人のなごりが妙に心に残り不思議な感慨をもたらした。

今回はRFをメインとして地形図と現地の違い、地形図から読み取れない発見もあることを改めて認識することが出来た。

報告者　福田　洋子

△△△△△△△△△△△△△

講習山行
城ガ崎の岩登り講習
11月23日、24日

参加者

新保司（講師）

２３日の参加者　横川秀樹、浅村和史、小林幸恵、日浅尚子（本科）

２４日の参加者　小林幸恵、日浅尚子（本科）

計４名

報告

東伊豆の城ガ崎は、波音を聞きながらクライミングができ、暖かいのが魅力。小川山のシーズン終了後はここに移動するクライマーが多いようだ。２２日、城山でマルチピッチ講習を受けていた横川・浅村組、新保講師と合流、２３日朝から行動開始した。

富戸地区のフナムシロック南の岩の南面に立木を利用して支点を作り、岩に向かって左からメルトダウン（５．９）、フラッシュダンス（５．９）、ネッシー（５．８）を登った。

小林・日浅組は右端のネッシーから。核心は上部のフレアードチムニー。弓状に曲がり、内部が膨らんでいる。右半身をチムニーに入れ、右足のひざと足裏でツッパリ棒にし、ずりずり上がった。女性の足の長さだとチムニーの幅と合うが、男性は足が余ってたいへんだろう。午後にこのチムニーを逆向き（左半身が中）で登ったら、ずっと楽だった。チムニーはどちら向きで登るかで難易度は随分変わるようだ。

それにしても、海辺の岩場は気持ちがいい。チムニーで体を横向きにすると、しぶきを上げて打ち寄せる波が目に入った。ずっと向こうには釣り人も。この景色に波音。海の岩場のだいご味なのだろう。

真中の「フラッシュダンス」はクラックがポイント。足ははまるが、手が決まらない。「突っ込んでひねる」「親指の付け根を膨らませて」と思っても、「ピタッ」とこない。てこずっていると、腕がどんどん張ってくる。途中敗退。このルートは、男性陣も苦労していたようだ。左端の「メルトダウン」は意外にも到達点直前が難しかった。ホールドがなく、離れた右側の溶岩が固まったような穴ボコ岩まで手を伸ばすしかなかった。

午後からは波が荒くなり、ロープもカラビナ類も潮がついてべたべた。お湯で洗うなどの手当てをしないと使えなくなるそうだ。

２４日は幕岩へ。正面壁エリア右側の「Ｎｏ．７」で練習。２５メートルほどの長さだが、下部はスラブ、上部はチムニーと、一本で二度おいしい。一度目はおっかなびっくり、どう行けばいいのが悩んだが、二度目は度胸もついて時間短縮できた。「小川山のスラブで苦労したので、靴を新調した」という小林さんは、スラブもすいすいだった。

２２日と２３日の夜は、宿泊した貸し別荘（安くて快適）で、ザイルワークの講習会。新保講師からは、登り方はもちろん、用具のことやクライミングの重要事項も手取り足取り指導してもらい、朝から夜まで、目から鱗、充実の二日間だった。日和田講習や岩の自主で行き詰まっている人には、新保講習会は絶対おすすめだ。

報告者　日浅　尚子

△△△△△△△△△△△△△△

自主山行
二子山西岳・中央稜
11/24(祝)

参加者

伊藤幸雄(SL)・横川秀樹(L)

計２名

山行のポイント

マルチピッチの経験を積むこと

報告

二子山の頂上付近はガスに覆われている。林道を進み高度を上げるにつれて、車の窓ガラスにも水滴がついてきた。雨か、それとも、霧のせいか・・・。

「降ってきたら、このまま日和田でも行きますか？」ちょっと、ホッとしつつ助手席の伊藤さんに話しかける。

「イヤぁ、おとといい日和田でも一人死んでいるんだよね。知っている人だけにショックだよ」と、思いがけない返事にビックリ。伊藤さんはきのう日和田へ行ってそのことを聞いたらしい。

なんだか朝から嫌な予感がする。きのうインターネットで見た二子山西岳のそそり立つ怪異な容貌に圧倒され、最初からプレッシャーに負けているようだ。

が、とりあえず、林道の駐車スペースまで車を走らせる。その途中には、何組かのフリークライマー達がテントを張ってたむろしていた。

８時半頃、股峠まで5分という登山口の駐車スペースに到着。とりあえず準備。空中に浮かぶ水滴がハッキリと見える。この分だと、岩場もしっとりと濡れているかもという気がするが、偵察も兼ねて、中央稜の取り付きまでは行ってみることにした。

股峠から坂本方面に下り、祠エリア（フリーの岩場）を過ぎて踏み跡が二つに分かれる。壁沿いの方へ行けば取り付きに着くはずだと思ってそちらへ行くと、どんどん急傾斜になっていき、気が付いた頃には、藪だらけの岸壁の中という結構な危険地帯にはまり込んでしまっていた。落ちるとそれなりの怪我はまぬがれないという状況の中、ザックをおろし、ハーネスを着け、40mの懸垂で一旦下まで降りる。そこから、踏み跡を100mほど辿った所が目当ての中央稜取り付きで、先行のパーティーがこれから取り付こうとしているところだった。

我々は、と言えば、もうすでにかなりのアップをした状態になってテンションも上がっていたので、「登るしかない！」みたいな感じになっていた。

最初のピッチは私がトップで行くことにして、後はつるべ式で登ることを確認。まず１ピッチ目、見た目には簡単そうに見えたが、数メートル登ったところでフレークを右に移動する箇所が悪い。おっかなびっくり、なんとか乗り切って終了点へ。

２Ｐ目は伊藤さんがリード。オリジナルのライン取りは凹角のクラックを行くのだが、かなり手ごわく左のフェースへ一旦逃げて（ここも厳しい）から上へ抜ける。

核心と言われる３Ｐ目は巨大なピナクルの右側クラックを登る。最後の抜け口はかぶり気味となっていて、そこが難しい。しかし、なんと上のハーケンからお助け紐が垂れているではないか。それを遠慮なく使わせてもらって（さらに、フットホールドにＲＣＣボルトも使った！）一応クリアー。トップは落ちないことが大事なのだ。細かいことにこだわってはいられない、と一人で納得。実際には納得のいかないクライミングだったけど・・・。

３Ｐ目が終わると大テラスに出るので、小休止。先行パーティーのクライミングを観察しつつ、ザックからお茶を取り出し乾いたノドを潤す。

４Ｐ以降は特に問題となる箇所はなかった。プロテクションのあまり取れないピッチもあったが、そういうところは概して易しい。

７Ｐ目の草付きを登ると稜線に出て、二人ガッチリと握手。そこから西岳頂上方面に向かうとしっかりとした道標があって股峠方面へ下る。

登攀開始は 10 時半。登攀終了は 14 時。駐車場到着は 14 時半すぎ。装備は二人で、ヌンチャク 18 本（60cm スリングで作った手製ヌンチャクを含む）。キャメロット２セット。アブミ１台。その他、スリング、カラビナ類をいくつか。実際には、アブミは使用しなかったが、あると心理的には安心だった。キャメロット（エイリアン含む）は小さいサイズから大きいサイズまで要所要所で活躍してくれた。なくても登れるとは思うが、万一落ちたときのことを考えるとあるに越したことはない。もう一度、チャレンジしてみたいルートだ。

報告者　横川　秀樹

△△△△△△△△△△△△△△

投稿

山に行けない休日におすすめの新刊

山に行けない休日におすすめの新刊の文庫本２冊を紹介しよう。

「山頂に立つ」「われ生還す」（いずれも扶桑社セレクト　Ｃ・ウィリス編）。世界第一級の登山家たちが自ら書いた登頂記（あるいは敗退の記録）を集めたアンソロジーだ。

「山頂に立つ」は、ジョン・クラカワーのアラスカの高峰デヴィルス・サムの単独登攀記、ジョー・タスカーのＫ２など８編。「われ生還す」はモーリス・エルゾーグの「処女峰アンナプルナ」、Ｈ・Ｗ・ティルマンの「ナンダ・デヴィ登頂」など7編。自然と山の猛威を前に人はどう立ち向かうのか、仲間の死をどう受け留めるのか、切り立つ氷の岩をどう越えるのか、ザイルをどう使ったのか。山に挑む人間のすさまじい戦い（中にはザイル仲間との葛藤や、現地案内人である政府役人とのトラブルも）に、自分が今そこにいるような、そんな錯覚に陥る。寝る前に読んだら、夢を見た。私はエヴェレスト西陵に立っていた。山岳ドキュメントとして、読み応え充分。第一級の作品集だと思う。（H記）

投稿

C－UPコラム『新人クライマーのひとりごと』最終回（第13回）
発表！ 2003 山塾十大ニュース

早いもので 2003 年も残すところあとわずかです。（この号がお手元に届く頃には、2004 年になっているかもしれません）先月号のコラムでは、2003 年の講習を受講者の多かったベストテンという形で振り返りましたが、今月は『十大ニュース』の発表です。

山塾本科で今年起きたいろんな出来事。辛かったこと、楽しかったこと、感動したこと、ビックリしたこと、悲しかったこと・・・、皆それぞれが色々なことを一年の間に体験してきました。そうした中から印象に残った出来事を、本科生や同人の皆さんに投票して頂きましたので、10 のトピックスとしてここにご紹介することにします。

（12 月 11 日集計）

第 10 位　技術委員会、月一回に定例化

６月から技術委員会が、月一回開催されることになりました。「技術委員会」って何？と思っていた私たち本科生にとって、ようやくその存在意義が分かってきました。また、技術委員会と直接関係はありませんが、今年から月例山行が始まりました。今の

ところ、まだ3月の安達太良と 11 月のわらじ納めだけですが、今後は、技術委員会主導で月例山行が企画されるようになればいいな・・・という声もチラホラあるようです。金沢委員長よろしくお願いします。

第９位　人工壁トレーニングが本科生に浸透

人工壁のための人工壁トレーニングではなく、私たち本科生それぞれが、それぞれのやりたい山のための人工壁トレーニング。岩崎さんの考えに反するものでは全然ありません。各自で、会社帰りや時間のあるときなど、練習をする人が増えています。

第８位　新保氏、山塾講師に復活

新保さんが６月から山塾講師として再登板しました。主にマスターステップを担当ということで、小川山クライミングや一ノ倉の本番ルートもありました。初めて教わる技術もたくさんあり、とても勉強になりました。

第７位　白毛門、飲み過ぎで沈没者多数

今や伝説となった２月の講習会。夜中、シュラフの中にゲロってしまったＩ君や、二日酔いの中、死ぬ思いで登った人々多数あり。

第６位　新ハイもビックリ！八子ヶ峰であわや遭難

山スキー初体験メニューとして企画された日帰り講習。明るいうちに下りる予定が、遅れに遅れて夜８時に下山。下山場所も予定とは全く違った場所になり、とあるホテルの庭に出てしまいました。 S氏の奥さんが心配して警察に通報しあわや遭難騒ぎに。

第５位　長谷川カップ、M同人とＹ本科生が完走

71.5km の日本山岳耐久レースで、同人のM氏と本科のＹ氏が出場。二人とも見事完走しました。M氏は自己ベストを更新する 12 時間で、 Y氏は 16 時間 20 分でゴールしました。来年は山塾からチーム（３人編成）でエントリーしたいものです。

第４位　水無川集中。沢初めの好企画、戸沢に集結

２ヶ月前から練りに練った沢登りの集中企画。コースの選択、グループ分け、技術委員会との折衝など、企画者のＩ氏は大変なエネルギーを使ったはず。この場を借りて御礼申し上げます。このほかにも、今年一年、自主山行が盛んに行われました。

さて、ベスト３を発表する、その前に・・・、
『番外』です。

◆その壱　天気には勝てない？　講習中止が相次ぐ

夏には『北岳バットレス』が雨で二週連続中止、さらに『南ア大無間・小無間』も中止となりました。また、この冬、山スキーの『かぐらシーズンインフェスタ』も雪不足のため残念ながら中止。そう言えば、夏は講習中止の残念会を池袋で開催。朝までカラオケでウサを晴らしました。

◆その弐　韓国インスボンにＳ氏とＨ氏が遠征

スラブとクラックの素晴らしいマルチピッチクライミングが楽しめるというインスボンへお二人が行ってこられました。海外でのクライミング経験は貴重なものだったのではないかと思います。私たちもいつか海外の岩や山に登ってみたいものです。

◆その参　深川S Cの人工壁閉鎖が決定

山塾が管理している深川スポーツセンターのクライミングウォールが来年３月に閉鎖されることになりました。講習会での事故が影響したようですが、ちょっと残念です。

◆その四　次期編集長に山野美香さん決定

シーアップワールドの編集長は来春から山野美香さんが引き継ぐことになりました。現編集長の末木さん、あと３ヶ月どうぞよろしくお願いいたします。次期編集長の山野美香さん、４月からどうぞよろしくお願いいたします。

では、いよいよ、ベスト３の発表です。

第３位　前主任講師独立。工藤・金澤新体制へ

前主任講師のM氏が３月に独立、それに伴い、工藤さんが主任講師になり、金澤さんがそのまま技術委員長という新体制がスタートしました。それにしても、山塾本科の山スキー、スノーシュー、ビーコン等がM氏独立と共に全て消え去ったのには本科生一同、唖然呆然。

第２位　大鹿村集中、分杭峠でゼロ磁場効果体験

11 月の三連休、南アルプスと中央アルプスで自主集中。その後、ゼロ磁場の不思議な効果があるという分杭峠近くの大鹿村に集結。豪快に飲み、豪快に酔っ払った人も数知れず。例によって、本科生と講師が活発に議論しました。分杭峠効果でヒザ痛が治った人も。

第１位　剱合宿。16時間行動で八峰から本峰登頂

夏合宿は二年ぶりに剱岳。天候にも恵まれ、八峰上半部を縦走し、北方稜線から剱本峰に立ちました。剱沢のＢＣを朝４時に出て、戻ったのは夜８時過ぎ。日はとっぷりと暮れていましたが、参加した多くの本科生にとって、たいへん思い出深い山行となりました。

『新人クライマーのひとりごと』は今月号で最終回となります。一年間、つたない文章を読んで頂き、どうもありがとうございました。少し充電期間をおいて、来春からパワーアップした内容で、再開する予定です。　　（秀）

編集局から

１２月号は、１１月頭に南アルプス大鹿村集中山行があり、多くの原稿をいただきました。私が担当してから最多の９ページです。

２００３年の十大ニュースを読むと、ずいぶん印象的な出来事が多かった１年だなあと感じられます。Ｃ－ｕｐワールドの紙面も自主山行の意欲的な山行記録で充実できました。毎回号掲載させていただいたコラムも面白かったです。ありがとうございました。

ここ１年は自主山行記録中心の紙面になっていましたが、来年はどうなりますでしょう？来年度はますます技術委員会などの活動も豊かになる様子ですし、編集担当者も交代し、また違ったＣ－ｕｐワールドになっていくのでしょう．．．．

１２月末には雪山の研修企画山行などが予定されておりますので、また山行記録原稿よろしくお願いいたします。

アドレス

無名山塾　http://www.sanjc.com

Phone　03-3941-3481

Fax　03-3941-3482